

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00343

研究課題名（和文）人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベース更新に係る新出資料調査と公開運用の研究

研究課題名（英文）Research on public use and newly discovered materials for updating the databases of performance records for ningyo joruri bunraku in the early modern period

研究代表者

神津 武男（KOZU, TAKEO）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：10424821

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽」（義太夫節成立以後の人形芝居）の、真に科学的な通史の完成を目指して、資料整備を進めている。筆者は「浄瑠璃本」（通し本。演劇台本・脚本に相当する）、「番付」（ポスター・チラシに相当）の二種の史料について、日本国内および海外で悉皆調査を展開してきた。近年新たに所在を把握した未調査機関を追加的に実地踏査して、「浄瑠璃本」「番付」各データベースの充実と精度の向上につとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1995年1月の阪神淡路大震災、2011年3月の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所爆発事故によって、史料のデジタル複製とそのコピーを分散させて保存を図るべきことの重要性は、ひろく社会的に認知された事柄であると考えられる。国文学研究資料館の「国書データベース」をはじめとして、江戸時代・近世期の史料のデジタル画像の公開は加速しているが、現状はたとえば浄瑠璃本『仮名手本忠臣蔵』の初板本はどの所蔵機関のどの請求番号の本なのかなどの検索の手段が未整備な状態である。本研究課題が提供する浄瑠璃本と番付のデータベースは、索引・メタデータとして機能する点に学術的・社会的意義を有すると自負するところである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to complete a systematic history of ningyo joruri bunraku (puppet plays after the establishment of gidayu-bushi) in the Edo period. I examined two types of primary sources, joruri books and joruri programs, in Japan and abroad. I conducted fieldwork on newly uncovered materials and incorporated them into the joruri books and joruri programs databases to make these resources more precise and comprehensive.

研究分野：日本文学

キーワード：浄瑠璃本 人形浄瑠璃文楽 日本古典文学 出版（出版） 日本近世演劇 書誌学 データベース 上演記録

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽(にんぎょうじょうりぶんらく)」(義太夫節成立以後の人形芝居)の上演記録は、『義太夫年表 近世篇』(八木書店、1979-1990年)の成果を最新とする。しかしその完結から20年余を経て、少なくとも四次の補正更新情報が別々に報告されている点が、利用上の障壁となりつつあった。

上演記録というもっとも基本的な情報(とその検索手段)における混乱状況を解消することは、当該研究分野の深化に有用と考えられるばかりでなく、日本近世文学をはじめとする近接諸分野への情報提供の観点からしても、早期に実現されるべき課題と考えた。

筆者は以前、基盤研究(B)「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの作成と活用・公開に関する基礎的研究」(研究課題番号22320054。2010-2013年度)の研究代表者を務め、上記の課題に取り組んで、上演記録のデータベース化に着手している。

また従来の人形浄瑠璃史は、上記のように番付に基づいて構想されたが、番付は興行開始を予告することに目的をもつ出板物なので、基本的に興行開始後・上演中の改変などを反映するところは少ない。浄瑠璃本は興行開始後(およそ五十日後)に刊行されることから、事後の時時点で当該興行を統括する性格を有する。浄瑠璃本の諸本研究を進めることによって、事前(番付)事後(浄瑠璃本)の双方の史料に基づいて、浄瑠璃史を構想することができるようになる。

筆者は以前、若手研究(B)「浄瑠璃本による近世後期人形浄瑠璃史の研究」(研究課題番号18720049。2006-2007年度)の採択を得るなどして、日本国内外での浄瑠璃本の所在調査・書誌研究を進めている。

### 2. 研究の目的

全体構想は、我が国が世界に誇る伝統演劇「人形浄瑠璃文楽」の、伝統の実体を解明し、真に科学的な通史を完成させ、以て当該演劇およびその研究の一層の隆盛を大目標とするものである。本研究課題はその基礎となるべく、専門家(人形浄瑠璃文楽の演技者や劇場関係者)はもとより、当該演劇に関心をもつ日本国民一般ひいては外国人研究者等へ対して、正確で信頼のおける上演記録・興行記録へのアクセスを可能にすることを通じて、大方の関心と叡智とを当該分野へ集めることを所期の目的とするものである。

### 3. 研究の方法

人形浄瑠璃文楽研究の進展には、通説の孫引きでなく、原史料に基づき直すことが必要だと考える。そのためには研究者はもちろん、人形浄瑠璃文楽に関心を寄せる者すべてが必要な資料にアクセスできる環境を整備することが重要である。筆者はこの認識に立って、

- ・浄瑠璃本(通し本。こんにちの演劇の台本・脚本に相当するもの)

- ・番付(こんにちの演劇のポスター・チラシに相当するもの)

の二種の史料について、日本国内および海外で所在調査・書誌研究を展開してきた。それぞれについて「浄瑠璃本」書誌データベース、「人形浄瑠璃番付」書誌データベースを作成して、情報を管理している。

近年に至り新たに所在が知られた所蔵機関があったので、実地に史料調査を追補的に行ない、これまでに蓄積した書誌情報との校合を進めて、人形浄瑠璃文楽の資料学的研究をより精緻な段階へと深化させることを目指した。

このため本研究課題では、全三年度にわたって、次の事業を行なった。

- ・浄瑠璃本(通し本)を所蔵する未調査機関での史料調査

- ・番付を所蔵する未調査機関での史料調査

以下、各事業ごとに訪問した機関名・史料数を記して、調査の概要を示したい。ここに史料の閲覧調査を許された所蔵機関・所蔵者の皆様へ感謝申し上げたい。

では次の11機関を実地に訪ね、269冊について新規の書誌調査を行なった(機関名のあとの数字は冊数)。

- ・神奈川県立公文書館 13
- ・京田辺市市史編纂室 4
- ・慶應義塾大学斯道文庫 30
- ・神戸女子大学古典芸能研究センター147
- ・国立劇場(菅野序柳旧蔵資料) 21
- ・中泊町博物館 13
- ・長野市立博物館 1
- ・鳴門市史編纂室 2
- ・野田市立興風図書館 6
- ・藤沢市藤澤浮世絵館 1
- ・南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館(鶴澤友路師旧蔵資料) 31

なお調査の旅程ではほかに、抜き本のみを所蔵する機関や、調査済みの機関であっても再調査の

必要があって訪問した機関もあるが、これについては割愛する。

では次の4機関100枚について新規の書誌調査を行なった(機関名のあとの数値は枚数)。

- ・大阪市立中央図書館4
- ・関西大学図書館81
- ・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター8
- ・京都府立京都学歴彩館7

なお調査では近代に行なわれた興行の番付も同時に閲覧しているが、これについては割愛する。また関連する史料として人形浄瑠璃関係者の墓碑についても調査した。三年度で調査した寺院名は次の通り(訪問順)。

- ・長久寺(大阪市。竹本津太夫ほか)
- ・鳥辺山(京都市。宮園千鳳館)
- ・江ノ島(藤沢市。江戸の芝居が寄進の石灯籠)
- ・金沢湊町(金沢市。各所に遺る義太夫節関係者の墓碑)

この内、金沢市の墓碑は「金沢湊町石造物マップ(金石・大野・粟崎)」で所在を把握することができた。金沢文化財ボランティア「うめばちの会」の活動として、金沢市内の「石造物調査」を行なって、「卯辰山山麓地区」「中心市街地」「寺町台」「金沢湊町」4部の「石造物マップ」を編んだもの。所在・建立年・略歴などを紹介するほかに、石の名称・材質を記すのが特色であるが、金沢市埋蔵文化財センターの協力を仰ぐものと推察する。金沢市の事例は、近世期の墓碑・石塔の保全のための、理想とするべきモデル・典型、全国的にも先駆的な活動と考える。

悪疫・新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のために三年度にわたって実地踏査が大きく制限されたのであるが、この制約を補って余りある進捗をみたのは、『義太夫年表近世篇』刊行会が収集した番付写真その他の関係資料について、初年度においてデジタル化することが出来たことに因る。鳥越文蔵先生は内山美樹子先生とともに『義太夫年表近世篇』刊行会の事務局をつとめられた。刊行会の資料は、某所に委託されていたが、積極的に活用されることなく置かれていた。筆者は原史料の散逸が進む現状に鑑み、刊行会収集写真が原本を知る唯一の存在となりつつあることを説き、鳥越先生は御理解下さり、委託先から取り戻して下さることとなった(この交渉には本研究課題開始以前から数年を経ている)。2020年12月5日、鳥越文蔵先生御自宅において、鳥越先生のお言葉も添い、赤間亮氏が立命館大学アトリサーチセンターでデジタル化することをお引き受けくださることとなった。赤間氏が驚異的な早さでデジタル化作業を進められ、2021年3月22日データ出来。ご入院が長引かれていたもののベッドの上で編著書の校正をするほどお元気であったのに、鳥越文蔵先生は4月5日朝に御逝去された。ながくお心にかげられた課題であったので、直接にご報告することが出来なかったのが残念でならない。

#### 4. 研究成果

浄瑠璃本(通し本)を所蔵する未調査機関での史料調査の結果としては、「浄瑠璃本」書誌データベースに新規に調査し得た269行のほかに関係書も含め、かつ長年収集するばかりでちゃんと書誌を採らずにおいた私蔵本についても緊急事態宣言中の籠居を機会として整理し直し、結果、31,744行を数えるに至った。

従来知られていなかった新出史料は、筆者が新たに入手した『置土産今織上布』に遺った浄瑠璃本の包紙で、従来オキミヤゲイマオリジョウフと読んだが、「おきみやげいまおりさらし」と読むことが判明した。本文には「上布」に振り仮名「じやうぶ」とあるので、ジョウフと読んだこと自体に飛躍があった。しかるに「上布」という織物の呼称が一般化したのは、江戸時代後期からとされる(『国史大辞典』)。近松や海音の浄瑠璃本作者第一世代に「上布」の語がみえないことから、その理解は正しいと考えられる。いわゆる古語辞典も、「じょうぶ」のヨミ・用例を拾っておらず、原拠を示さずに「じょうぶ」とのみ読んでいるのが実状であるのは、古語辞典の用例も多くは翻刻書から抜き出したものなので、浄瑠璃本の例でいえば18世紀後半以降の初演作品は翻刻書が無いために、その収集範囲に入らない。18世紀後半期に大坂へ流入し始めたらしい「上布」のヨミが拾えないのは無理からぬことではある。義太夫節の浄瑠璃本は、日本語学の史料としても未活用の沃野であると再認識することとなった。

番付を所蔵する未調査機関での史料調査の成果としては、「人形浄瑠璃番付」書誌データベースに新規に調査し得た1088行のほか近代の分も含めて、結果、21,341枚を数えるに至った。この他に、本研究課題で新たに作成したデータ行としては『義太夫年表近世篇』刊行会収集番付写真を管理する分として、12,700行余を登録している。

本研究課題調査分では近世期11枚の新出があって、異板に関する情報(既知の史料の原板もしくは改修板である)を収集することができた。

また墓碑に関する調査では、前述の「金沢湊町石造物マップ(金石・大野・粟崎)」を手に記載の墓所をめぐる中で、訪れた隣の寺に「豊竹」姓の太夫の墓碑のあることに気付いた。これは調査に漏れたのではなく、当該地図は「竹本」姓に絞り込んで記載したものと推考する。太夫においては豊竹、三味線弾きでは「鶴沢」のほかの姓、あるいは人形遣いの石碑についても調査は済んでいると推考されるので、再度調査の機会を持ちたいと思う。

なお本研究課題では、浄瑠璃本作者ふたりの著作年譜作成に取り組み、また人形浄瑠璃文楽の名称の始祖・初代文楽に関する歴史研究をまとめた。2021年度の論文「同時代史料から考える初

代文楽と「文楽の芝居」について 初代文楽を「植村文楽軒」と呼ぶことは誤りであること」に、初代文楽の伝記について同時代史料に依拠することに徹することで、同人の名乗りは「文楽」「竹本文楽太夫」のみであること、従来世襲名だともされた「文楽軒」の名乗りは確認できないことを指摘した。初代文楽の姓は「正井氏」で、明治に至って「植村」と改姓したとは『義太夫年表明治篇』に祐田善雄氏が明記するところだが、文楽関係者はもとより、研究者でも時代錯誤な名称「植村文楽軒」を用いる例が今に絶えないのは残念な限りである。初代文楽の遺族(妻子)が大坂稻荷社内東芝居の茶屋を引き受け、劇場経営に乗り出したことから同芝居が「文楽の芝居」と呼ばれて、こんにちの芸能の通称と転じたのであるが、その劇場経営参画の年次は通説には文化8年(1811)とされてきた。『義太夫年表近世篇』は、文化年間の担当者が同年正月興行を文楽遺族の経営参画の最初の興行だと断定する一方で、事務局においては芝居茶屋「文楽茶店」の墨印・墨書のあった場合には必ずこれを記載して、その関与の裏付けとするという方針があった、と鳥越文蔵先生に教えられた。同じく事務局をつとめられた内山美樹子先生へもお伺いしたところ、確かにその方針はあったと回答された。筆者が調査結果として、文楽遺族の経営参画が認められるのは文政元年(1818)正月以降である、と報告したところ、内山先生にはこの点はすでにお判りであった。内山美樹子先生は2022年8月3日に御逝去なさいました。この電話でのやりとりが恩師との最期の通信となった。番付という史料の上に芝居茶屋は墨印・墨書をして顧客を勧誘するのが近世演劇の慣習であるが、文楽遺族の「文楽茶店」の存在が史料で裏付けられる最初の年は、通説よりも遅い、文政元年であることを明確に指摘した。また初代文楽は高津新地に劇場を開設・経営したとする通説があるが、同所に許された名代・株が天保の改革時にまとめられた芝居槽・名代株の一覧に載っていないことから否定されることも指摘した。

浄瑠璃本作者の著作年譜のひとつめは、2020年度の論文「『日蓮聖人御法海』三段目切「勤作住家の段」の成立と伝来について 作者・並木宗輔の追善興行としての初演と、初代豊竹麓太夫の改訂本文による再生 附リ・並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」にまとめた、並木宗輔の著作年譜である。本作『日蓮聖人御法海』の初板本には、作者連名の二人目を「安田阿蛙」とする未改訂本と、これを「並木正三」とする改訂本の二種があるが、これまでに編まれた宗輔の年譜で、本作初板未改訂本を正しく捉えたものは存在しなかった。近松門左衛門に関する研究の水準に近づくためには、並木宗輔についても初板初摺本を追究した著作年譜を作成する必要があると考える。タイトルの読みも多くは慣例で済ませてきたところであるが、同時代史料の裏付けを採ることを徹底した。たとえば『丹生山田青海剣』のタイトルは近年新出した絵尽の振り仮名「にぶやまだせいがいつるぎ」とあることを以て正しい読みが判明したとする新説があるが、本文の「丹生」の振り仮名は「にう」とあって、これは「にぶ」とは濁らないので、絵尽の読みは疑わしい。道行揃の目録に「にうのやまだせいがいつるぎ」と振り仮名する例があり、これを採るべきことを提唱した。また従来指摘の無かった点であるが、本作三段目切「勤作住家」の現行本文は、初代豊竹麓太夫が添削した改訂本文によって伝承されていることを諸本研究の上で明らかとした。

浄瑠璃本作者の著作年譜のふたつめは、2022年度秋から京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターにおいて開催した展示「西村公一文庫 近松半二の浄瑠璃本」(全三期。2022年11月～2023年5月)でまとめた展示解説書3編である。日本伝統音楽研究センターでは、西村公一氏からコレクションの寄託を受け、基盤研究(B)「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」(研究課題/領域番号20H01205。研究代表者竹内有一)の採択を得て、2020年度から資料の整理に着手している。義太夫節の浄瑠璃本の内、通し本については、筆者が研究代表者をつとめた研究活動スタートアップ支援「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」(研究課題/領域番号16H07120。2016-2017年度)において先行して調査していたので、紹介展の初回は義太夫節の浄瑠璃本で開催して、その主題を「近松半二の浄瑠璃本」とすることを筆者が提案したものである。

早稲田大学演劇博物館は2022年度春季企画展「近松半二 奇才の浄瑠璃作者」を開催したが、半二の著作認定は筆者の旧稿「近松半二 署名作品一覧」(岩波講座『歌舞伎・文楽』第九巻「黄金時代の浄瑠璃とその後」、岩波書店、一九九八年所収)に依拠していた。ただし筆者旧稿で掲げた浄瑠璃本は61点であったが、上の研究活動スタートアップ支援での書誌調査によって、新たに追加すべき一作のあることが筆者においては判明していた。最新の著作数は62点であるので、「近松半二の浄瑠璃本」展で以て、初めて報告したものである。

近松半二の署名が新たに確認された作品は、安永6年(1777)3月大坂北堀江市ノ側芝居初演『伊賀越乗掛合羽』である。当該作の浄瑠璃本には、本文の前後(内題下・本文末)に作者署名がなく、作者が判らなかつた。本作の摺りの早い本の奥付には埋木で「作者近松半二誌」とあった部分を切り抜いて、裏から白紙を宛がう改修を施した本がいくつか遺る。白百合女子大学図書館・鶴見誠文庫の一本は当該箇所を切り抜かない、「作者近松半二誌」との記載を残したままの状態のものであった。すなわち未改修本が新たに出現したものである。近松半二は、本作『伊賀越乗掛合羽』と絶筆『伊賀越道中双六』の二度にわたって伊賀越の敵討に取り組んだことになる。

脚色姿勢の違いや、そもそもなぜ奥付の署名は切り抜かれるのか、北堀市ノ側芝居の2代豊竹此太夫の劇団への参加の姿勢など、改めて考える機会を持ちたい。また旧稿で近松半二の署名の遺る歌舞伎作品数を1作とし、演劇博物館の上記展示はこの点も踏襲したが、近年気付くところでほかに5作あって、近松半二が署名を遺した歌舞伎作品は都合6作だったとも判明していたので、これも「近松半二の浄瑠璃本」第三期展示で紹介した。なお並木宗輔と近松半二の著作年譜では、近松門左衛門において想定する「存疑作」(その著作である可能性の残る作品)という捉え方を導入して、宗輔や半二の著作である可能性のある範囲を広げて捉えてみることを提案、試行したものである。

最後に附言する。早稲田大学演劇博物館の企画展「近松半二 奇才の浄瑠璃作者」の図録では、74頁に「文楽」とは、江戸時代の淡路出身の劇場経営者・初代文楽(一七五一～一八一〇)の名に由来する。」と説くが、初代文楽を「劇場経営者」と呼ぶべき根拠が無いことは、2022年3月発表の上記拙稿「同時代史料から考える初代文楽と「文楽の芝居」について」につよく指摘したところである。当該図録同頁には「明治五(一八七二)年開業の松島の芝居にて劇場名に「文楽」を冠した。」とするのも不正確な記述で、劇場名として番付に記すのは「松島芝居」である。番付右上の座紋の入る位置に「文楽座」と示したのは、劇団・集団の名と理解すべきものである。そもそも劇場・芝居の名を、何々座と称するのは関東・江戸の風儀であり、上方では何々芝居と名乗りもし、呼びもしたものである。上方において劇場名としての「芝居」が、何々演劇と改められる変遷があって、関東風の何々座と改まっていく(角の芝居が角座、中の芝居が中座など)のは、明治半ばのことである。大阪における人形浄瑠璃の興行であって、何々劇場という意味で、何々座と番付に明記された最初は、「人形浄瑠璃番付」書誌データベースで検索すると、1876明治9年(1876)11月の「道頓堀弁天座」がはやく、これは旧の竹田芝居を改称したものである。のちに明治17年(1884)には「御霊文楽座」や「ばくろ町稻荷北門彦六座」の表示が現れるので、大阪の人形浄瑠璃の劇場名が、旧来の何々芝居から、関東風・江戸風の何々座へと改まるのは、明治17年以降と捉えておくべきだと筆者は考える。「人形浄瑠璃番付」書誌データベースの一般公開を急ぎたいと思う。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 神津武男	4. 巻 26
2. 論文標題 江戸の浄瑠璃本板元・大坂屋秀八と外題目録『両竹鑑』について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史の里	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 神津武男	4. 巻 25
2. 論文標題 同時代史料から考える初代文楽と「文楽の芝居」について 初代文楽を「植村文楽軒」と呼ぶことは誤りであること	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史の里	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 神津武男	4. 巻 13
2. 論文標題 『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について -作者・並木宗輔の追善興行としての初演と、初代豊竹麗太夫の改訂本文による再生- 附リ・並木宗輔浄瑠璃本著作年譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学高等研究所紀要	6. 最初と最後の頁 194 - 141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 神津武男	4. 巻 24
2. 論文標題 初代竹本綱太夫の添削活動と伝記に関する覚書 人形浄瑠璃文楽の歴史研究の難しさ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史の里	6. 最初と最後の頁 17 - 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

近松没後義太夫節人形浄瑠璃初演作品データベース  
https://archive.waseda.jp/archive/subDB-top.html?arg={%22item\_per\_page%22:20,%22sortby%22:[%221522a%22,%22ASC%22],%22view%22:%22display-simple%22,%22subDB\_id%22:%2275%22}&lang=jp

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------